戦局を左右したレジスタンス活動

第二次世界大戦における戦勝五大国のうち、フランスは欧州で戦争が行われた全期間（一九三九年九月から四五年五月までの六九か月）の実に七割（四八か月）近くの間、敵国のドイツ軍による実質的な占領統治下に甘んじることを余儀なくされた。

大戦勃発直後の段階では、フランス政府と軍の首脳部は、第一次大戦での輝かしい勝利の経験と、東部国境に構築した難攻不落の要塞「マジノ線」の効果に絶大な自信を抱いており、来るべきドイツとの戦争においても、フランス軍は敵に遜色のない戦いぶりを見せるものと期待されていた。

ところが、ドイツ軍が一九四〇年五月に西部戦線で大規模な攻勢作戦を開始し、戦車と急降下爆撃機を巧みに組み合わせた新戦術「電撃戦（ブリッツクリーク）」を展開すると、第一次大戦型の用兵思想に固執するフランス軍やベルギー軍は瞬く間に防衛線を崩壊させられ、ヨーロッパの誇り高き大国フランスはそれからわずか六週間後、屈辱的な降伏文書への調印を強いられることとなった。

しかし、ヒトラーを頂点とするドイツ第三帝国による間接的な支配を快く思わないフランス国民は、各地で自発的に抵抗運動を開始し、非力な武器でドイツ占領軍に対する武力闘争を繰り広げていった。ゲリラ対正規軍という図式の中では、ゲリラ側であるレジスタンス組織は常に苦境に立たされ続けたが、決して途絶えることのない彼らの地道な闘争は、ドイツ軍の占領政策に対して、いつしかボディブローのように徐々に効果をもたらし始めていた。

そして、一九四四年六月、待ちに待った米英連合軍の欧州大陸反攻作戦「オーヴァーロード」（ノルマンディ上陸作戦）が開始されると、フランスのレジスタンス組織は情報収集と敵後方の破壊工作という二つの分野を中心に上陸部隊の軍事作戦をサポートし、フランス解放からドイツ降伏に至るドラマの中で重要な役割を担うこととなったのである。

それでは、フランスにおける「祖国解放」の立役者として、今なお同国内で賞賛される反独レジスタンス組織は、どのような経緯を経て誕生したのか。ドイツ軍の占領統治下にあるフランスの国民は、彼らの存在をどう受け止めたのか。そして、彼らはいかなる方法でドイツ軍の強大な占領部隊と対峙し、彼らの闘争は第二次大戦の趨勢にどれほどの影響をもたらしたのだろうか。

《反独レジスタンスの発生》

フランス降伏と占領統治の始まり

一九四〇年五月十日、ドイツ第三帝国の総統アドルフ・ヒトラーは、西欧の大国フランスとベネルクス三国の攻略を目指す大軍事作戦「黄色の場合」を発動させた。

戦車と自動車化歩兵による迅速な突破侵攻に重点を置いたドイツ軍の大攻勢は、フランス軍指導部の予想を上回るスピードで、彼らが「大部隊の通過は不可能」と思い込んでいたアルデンヌの森林地帯を突破した後、ベルギー正面に展開していた英仏連合軍の主力を包囲することに成功。六月十四日には、戦火による人的・物的被害を避けるため「無防備都市」を宣言していた首都パリに、ドイツ軍部隊が無血入城を果たした。

1944年8月、セーヌ河口に近い村落に進行した英軍を迎える、フランス・レジスタンスの闘士たち。6月の連合軍のノルマンディ上陸の前後、地下から表舞台に登場した彼らの活動は最高潮に達し、独軍への交通・通信等に対する破壊工作や、連合軍兵士を独軍狙撃兵から守るなど大活躍した（AP/WWP）。

文＝山崎雅弘

栄光の レジスタンス

祖国フランスを解放した不屈の地下組織

「郷土と同胞を圧制から解放せよ！」
占領軍とその協力者に、命懸けで‘Non’を突きつけた人々がいた……

花の都パリがドイツ軍の手に落ちたことで、フランス国民の継戦意欲は粉々に打ち砕かれ、徹底抗戦を主張したポール・レイノー内閣は六月十六日に総辞職し、後を引き継いだフィリップ・ペタン元帥はこれ以上の抵抗は無意味と判断、ドイツとの休戦条約（事実上の全面降伏）を受け入れる決断を下した。六日後の六月二十二日、第一次大戦の休戦条約が締結されたのと同じコンピエーニュの森で、フランスとドイツの両国政府代表者が再び顔を合わせ、先の大戦とは完全に立場を入れ替える形で、休戦条約の調印が行われた。

フランスの敗色が濃厚となった時、勝者であるヒトラーの心は二つの思考の狭間で激しく揺れ動いた。一つは、第一次大戦後にドイツが経験したのと同様の「敗者の悲哀」をフランス国民にも味わわせたいという「復讐心」で、もう一つは、欧州で現在進行中の新たな戦争全体を見据えた上でフランスの処理を決定するという「戦略的判断」だった。

もしドイツが、チェコスロバキアや西部ポーランドと同様、フランスの国土全体を完全にドイツ領へと併合したなら、フランス国民の誇りは完膚無き

ドイツの電撃戦の前に、陸軍大国フランスは短期間で敗れ去った。下の写真はコンピエーニュの森に設置された客車から、休戦協定の調印を終えて出てきたヒトラー一行。客車は第一次大戦時にドイツの降伏調印の際に使用された車両で、「報復」のため持ち出された。フランス軍は、ヴィシー政権に認められた自衛用の兵10万と、ダンケルクから英軍と共に脱出した1万数千を除き解体されたが、後にレジスタンスに身を投じた軍人も多い。

までに打ち砕かれ、第一次大戦の復讐は完全に成し遂げられる。だが、そのような「復讐心」を満たすための方策をとったなら、フランス国内では愛国心に基づく大規模な反独抵抗運動が発生するものと予想され、海外のフランス植民地の政情も不安定化することは確実だった。

そのため、直接の敵国であるイギリスや、潜在敵国であるソ連との将来的な対決を考慮すれば、フランスを完全に屈服させるのではなく、独立国としての面子を保持させたままドイツの友邦国とする方が、戦争遂行上の戦略的判断という面では妥当だと思われた。ドイツ軍が直接手を下すよりも、フランスに親ドイツ政府を樹立させて、フランス国内の反独抵抗運動の弾圧と海外植民地の治安維持を委ねる方が、より合理的だからである。

こうして、ドイツは対イギリス戦の前線基地となるフランス北部を直轄の軍政支配下に置く一方、独仏間の係争地であった東部のアルザス＝ロレーヌ（ドイツ側呼称ではエルザス＝ロートリンゲン）地方のみドイツ領に併合し、フランス南部はドイツの利害に反しない範囲での限定的主権を有する新政府（南部の温泉保養地ヴィシーを首都と定めていたため「ヴィシー政府」と呼ばれる）の統治下に置く形で、フランス処理を完了した。

これにより、フランスは辛うじて、主権国家としての地位を保つことを認められたのである。

徹底抗戦を叫ぶド＝ゴール

一九四〇年七月十日、新生ヴィシー政府の初代首相に、第一次大戦の英雄ペタン元帥が就任した。

ペタンは、その純朴で実直な人柄がフランス国民に愛されていたが、イギリス嫌いで左翼思想を憎む民族主義者という横顔を持ち、第二次大戦の開戦以前にはヒトラー政権を「反共（対ソ）の防波堤」として評価する姿勢すら見せていたほどだった。

そのため、パリ陥落の衝撃も冷めやらぬうちに、今次の独仏戦争の勝者であるドイツに対する恭順の態度を示したペタンのヴィシー政府は、イギリスとの同盟関係から枢軸側（ドイツ・イタリア）のファシスト陣営へと鞍替えした「裏切り者」だとする論調が、枢軸国を除く諸外国のメディアで語られることとなった。

しかし実際には、ペタンにはフランス人の誇りをドイツに売り渡すつもりなどなかった。合理的な判断力と、冷徹な忍耐力を兼ね備えたペタンは、彼我の軍事力の差を冷静に認識した上で、正面から対決することを避けて、考え得る範囲で最善と思われる形での「独仏関係」を再構築することで、国家としての破滅を避けようとしていたのである。

そんな時、ドーヴァー海峡を隔てた対岸のイギリスでは、一人のフランス軍人が、ドイツ軍の支配下にあるフランス国民に対して、熱烈なアピールを繰り広げていた。その人物の名は、シャルル・ド＝ゴール准将といい、一九四〇年五月から六月の対ドイツ戦では第4機甲師団の戦車部隊を率いてドイツ軍に果敢な反撃を行う一方、六月五日以降は国防次官としてレイノー首相

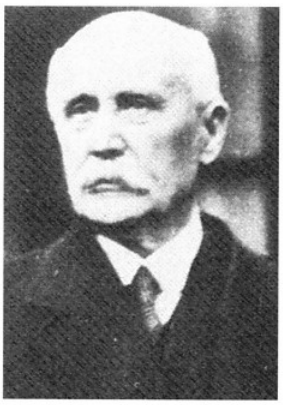
の軍事的判断に関する補佐役をも務めていた。

自国の敗北を認めず、宿敵ドイツに対する徹底抗戦を主張するド＝ゴールは、レイノー内閣が総辞職した翌日の六月十七日、イギリス軍の航空機でロンドンに渡り、翌十八日にラジオ放送を通じて祖国フランスの国民と軍人に、抵抗継続を訴える演説を行った。

「我々は、ただひとつの戦いに敗北しただけであり、戦争に敗れたわけではない。何が起ころうとも、フランスの抵抗（レジスタンス）の炎は消え去ってはならないし、また消え去ることはないであろう」

このラジオ放送を聞いたフランス人の一部は、イギリスに逃れたド＝ゴールに祖国解放の期待をつなごうとしたが、間もなく発生したある重大事件によって、フランス国民のイギリスに対する感情は一挙に悪化し、英国政府の庇護下にあるド＝ゴールの人気も雲散霧消してしまうことになる。七月三日、フランス海軍の保有する艦艇がドイツ側の手に渡ることを恐れたイギリス軍が、北アフリカのアルジェリアに停泊していたフランス艦隊を攻撃し、一三〇〇人にのぼるフランス兵を死亡させてしまったのである。

対独戦を生き延びた自国の艦隊が、こともあろうにイギリス軍の攻撃で撃沈されたことを知ったヴィシー政府は、七月四日にイギリス政府との国交を断絶するとの声明を発表した。そして、かつての同盟国イギリスの無慈悲な態度に失望したフランスの国内世論は、一時的にヴィシー政府の対独協力政策を容認する方向へと傾いたのである。



フィリップ・ペタン（一八五六～一九五一）。第一次大戦のヴェルダンで独軍を破った英雄。陸軍の大御所として第二次大戦を迎えるが、機甲戦術を軽視する過ちを犯した。ヴィシー時代の対独協力により戦後終身刑となり、獄中で死亡。

フランス国内での抵抗運動の始まり

このようなフランス国民の複雑な感情とは裏腹に、占領者として同地に君臨するドイツ当局は表面的には礼儀正しさを装いつつ、きわめて巧妙な行政手法を駆使して、フランスの人的および経済的資源を自国の戦争経済へと組み込む大事業を進めていった。

彼らはまず、ライヒスマルクとフランの為替レートを一方的に設定することで、合法的な「富の収奪」を行う一方、一日当たり四億フランという高額の占領費を支払う義務を、ヴィシー政府に負わせていた。また、一般家庭には「社会奉仕」の一環という形式をとって衣類や食糧の供出が強制され、フランスの若者は「ドイツ軍に捕らえられたフランス兵捕虜の帰国と引き換え」という名目で、ドイツ国内の軍需工場へと徴用された。

ヴィシー政府の樹立からしばらくの間、フランス国民の多くは、ドイツ当

降伏後のフランスは、ドイツの占領地区と、ヴィシー政権下の非占領地区に分断された。しかし、1942年11月に連合軍が北アフリカ西部に上陸すると、ドイツ軍はフランス全土を占領する。

ロンドン脱出後、ＢＢＣのスタジオからラジオ放送に載せて、故国フランスに抵抗を訴えるシャルル・ド＝ゴール。1940年6月18日に初めて行われたこの呼びかけは、敗戦のショック覚めやらぬ国民には、必ずしも高くない彼の知名度のためか、さほど注目されなかった。しかし次第にその指揮の下に、抵抗運動の集約が図られることになる（UPI・サン）。

局による諸々の搾取に対し、忍耐強く対処していた。対独戦終結直後の七月十日に実施された国民議会の選挙で、上下両院合わせて賛成五六九票、反対八〇票、棄権一七票という圧倒的な支持を得て全権を委任されたペタンが、内心の深い葛藤と戦いながらドイツとの「協働（コラボラシオン）」を国民に訴えている以上、当面は国難を幾度も切り抜けてきた国民的英雄ペタンを信じて、それに従うべきだと考える人々が多数派を占めていたからである。

しかし、第一次大戦におけるペタンの戦功を知らない若い世代や、長年のライバル国ドイツに対する事実上の屈従を快く思わない年輩のフランス人の中には、戦争全体の情勢変化を待つことなく、自らの手で一刻も早く祖国フランスの独立回復を成し遂げたいと考える個人が少なからず存在した。彼らは、国内・国外のいかなる組織の指示も受けることなく、手近な道具のみを用いて、ドイツ占領当局に対する抵抗運動を自発的に開始する。

こうした散発的な抵抗勢力は、一九四〇年後半から四一年中頃の時期には地域ごとに小集団を形成して果敢に活動したものの、一般市民からの広範囲な支援を受けるまでには至らず、彼らの闘争による軍事的ないし政治的成果は皆無に等しいものだった。

ところが、一九四一年六月の独ソ戦勃発と、翌四二年四月に発生したヴィシー政府内の政変という二つの重大事件の発生により、ヴィシー政府の国民的信望は大きく揺らぎ、それに伴って反独抵抗運動の炎がフランス市民の間で一挙に燃え広がることになる。

一九三九年八月に締結された独ソ不可侵条約を尊重し、それまでドイツ占領当局に対して忍従を強いられてきたフランス共産党は、ドイツ軍のソ連侵攻開始で情勢は一変したと考え、ヴィシー政府の対独協力政策に対して公然と反対を表明する姿勢に打って出た。

そして、モスクワからの指令に従い「義勇兵パルチザン（ＦＴＰ）」と呼ばれる武装ゲリラ組織を創設した彼らは、北部のドイツ軍占領地域と南部のヴィシー政府管轄地の境界付近を中心に、ドイツ軍将校の暗殺や鉄道爆破などのゲリラ闘争を開始したのである。

また、四二年四月十九日にペタン（ヴィシー）政権の閣僚経験者ピエール・ラヴァルが、ドイツ側の後押しを受けてヴィシー政府の実権を掌握すると、反独抵抗運動の志願者はフランス各地で激増した。休戦後も独立国家としての主権を堅持し、ドイツに対する全面的な軍事的協力を頑なに拒み続けたペタンとは異なり、親ドイツ派のラヴァルはフランス軍が休戦後も保有していた各種兵器の一部をドイツ軍に提供するなどの軍事協力を推し進め、数度にわたって「私はドイツの勝利を望んでいる」との声明を発表していた。

こうして、フランス各地ではドイツの占領統治に反対する武装勢力が雨後の筍（たけのこ）のように出現し、反独抵抗運動（レジスタンス）のうねりが巨大な社会現象として、ヴィシー政府の対独協力体制を根底から揺るがし始めたのである。

《レジスタンスの組織化と闘争の拡大》

組織の統合と統一指導部の模索

ヨーロッパの精神文化においては、暴君の圧制に対する抵抗を自然権（人間が生きる上で必要とする根元的な権利）と見なす伝統的な思想哲学が中世

の時代から継承されており、とりわけ十八世紀末に革命が起こったフランスでは、圧制への抵抗という行為が持つ崇高さに重きを置く風潮が強かった。

例えば、一七九三年六月に制定されたフランス憲法の権利宣言第三五条には「政府が人民の権利を侵害する時は、反乱は人民の持つ最も神聖な権利であり、また最もかけがえのない義務である」との文面が明記されていた。

このような精神的土壌から生まれたフランスのレジスタンス運動は、その活動の初期においては、個々人の自発的な意志による、それぞれの分野での「ドイツおよびヴィシー政府への攻撃ないし非協力」という形で具現化されていた。それゆえ、各地で自然発生的に誕生した小規模な抵抗組織は、統一的な指導部を持っておらず、他の抵抗組織の活動状況についての信頼できる情報がほとんど得られないまま、個々の小組織を率いるカリスマ的なリーダーによって個別に決定が下されていた。

だが、四二年の夏以降、これらの小組織が大勢の志願者を受け入れてその規模を拡大すると、それまで個別に活動してきたレジスタンス組織は互いに水面下での連絡を取り合うようになり、それぞれの抵抗組織の輪郭も少しずつ明確に浮かび上がり始めた。

この時点で、最も有力なレジスタンス組織へと成長していたのは、前出の共産党系組織ＦＴＰのほか、アンリ・フルネイ大尉の率いる「コンバ（戦闘）」や新聞記者エマニュエル・ダスティエをリーダーとする「リベラシオン（解放）」、ジャン・ピエール・レビの「フラン・ティルール（義勇軍）」などだったが、複数の組織が連携して大規模な作戦を行うには依然として組織間の連携が不十分であり、ドイツ軍に与えた打撃という点では依然として、ＦＴＰによる無慈悲なテロ活動によるものが最も大きかった。

また、フランス国内の山中では、ドイツへの強制労働を忌避した若者が自給自足の生活を送りながら「マキ」と呼ばれる武装集団を形成していたが、彼らもまた他の既存組織への服従を拒み、自立した指揮系統を保持していた。マキとは、コルシカの方言で「雑木林」を意味し、社会を追われたお尋ね者の潜伏場所を指す俗語としても使われていた。

フランス国内でレジスタンス活動に従事する人員の数は、四一年末の約一〇〇〇人から、四二年末には約七万人へと爆発的に増加していた（人数については厳密な統計がないため諸説あるが、いずれも概算）が、指揮系統の不統一という重大な組織運営上の問題を抱えていたため、その総人数に見合った成果を挙げられずにいた。そのような状況を打開するため、フランス南部で県知事を務めた経験を持つ一人の男が、秘密裡にレジスタンスの各組織と接触し、全国的な統一指導部の創設に向けた調整活動を開始した。

彼の名は、ジャン・ムーラン。質素ながらも品のある衣服に身を包み、穏やかな笑みを絶やさない、この物静かな人物の内面には、フランスにおけるレジスタンス運動の将来を大きく変えることになる、熱く灼けるような情熱と強靱な意志が宿っていた。

統合の鍵を握る男 ジャン・ムーラン

一八九九年六月二十日、南仏のベジエという街に生まれたジャン・ムーランは、第一次大戦に従軍（実戦は経験せず）後は国家公務員として勤勉に働き、第二次大戦直前の一九三八年四月

指揮官による襲撃計画の説明に聞き入るマキ団員たち。中には女性の姿も見える。ヴィシー政府による強制徴用の忌避者を中心にしたマキは、20〜30の隊に分散し常に移動しつつ活動した。

フランス・レジスタンス組織化の功労者で、これに命を捧げたジャン・ムーラン(1899〜1943)。1943年に捕らえられ、激しい拷問を受けたが、活動の中心人物として多くを知りながら、遂にその一片も漏らさずに耐え抜いた。絵心のあった彼は、拷問を指示したゲシュタポの将校を風刺画に描き、相手に突きつけたといわれる（AKG/PPS）。

には史上最年少の知事として、南仏アヴェイロン県に赴任している。

その後、三九年二月にウール・エ・ロワール県知事に任命され、四〇年六月十九日に同県の県庁所在地であるシャルトルにドイツ軍が入城すると、ムーランは儀礼上、大礼服を着て敵軍の将兵を出迎えた。

ところが、ドイツ軍将校が提示した、フランス軍（セネガル兵）の行状を侮辱する内容の文書への署名を拒んだムーランは、ドイツ兵による暴行と拷問を受け、一時は絶望して自決を試みたが、運良く一命を取り留めることができた。

この事件を通じて、ドイツ軍による占領統治の実体を思い知ったムーランは、四〇年十一月に県知事を解任されると直ちにイギリス行きの準備を開始し、九か月後の四一年十月二十日にポルトガルのリスボンからの民間機で英国本土へと降り立った。

ロンドンでド＝ゴールと面会したムーランは、四〇年六月にド＝ゴールが組織した亡命政権「自由フランス」（四二年七月に「戦うフランス」へ改称されたが、本稿では便宜上「自由フランス」で統一）の指揮下に、フランス国内の全レジスタンス組織を編入するという構想を話し合った後、四二年一月一日の夜にイギリス軍の輸送機で南フランスへと飛び、アルピルという町にパラシュートで降下した。

無事に祖国帰還を果たしたムーランは、まず二月に「リベラシオン」の指導者ダスティエとの接触を試み、続いて他の組織を率いるリーダーとも秘密会談を重ねた。

全国的な抵抗組織の統合を目指すムーランの努力は、なかなか実を結ばなかった。国内で地道な活動を続けるレジスタンスの幹部たちは、安全なイギリスに落ち延びた後も貴族然とした態度を崩さず、フランスの抵抗組織に対して居丈高に「指示」を送るド＝ゴールを快く思っていなかったからである。とりわけ、共産党などの左翼系組織は右派のド＝ゴールとの政治思想の違いを重視し、自由フランスとの共闘に難色を示していた。

だが、ムーランの根気強い折衝が重ねられるにつれて、各組織の指導部の態度も次第に軟化し、まず四二年十月にコンバとリベラシオンの合同組織「秘密軍（アルメー・セクレテ）」が実現、三か月後の四三年一月にはこれにフラン・ティルールを加えて「統一レジスタンス運動（MUR）」と呼ばれる大組織が編成された。

抵抗組織の統合で、より効率的な情報収集と作戦行動を行えることに気づいた各組織のリーダーたちは、いつしか自由フランスに対する猜疑心を捨てて、ムーランの提唱する統合組織化の構想に協力するようになっていった。

そして、四三年五月二十七日、パリのデュ・フール通りに面した建物の一室で、フランス各地でレジスタンス活動や労働組合を指導する一七人のリーダーとムーランが一堂に会し、ムーランを初代議長とする「全国レジスタンス評議会（CNR）」の第一回目の秘密会合が開催された。

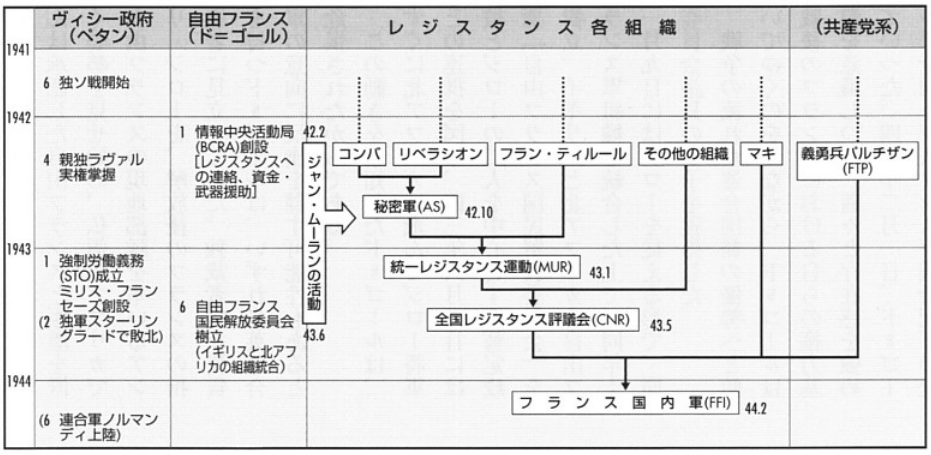
これにより、FTPを除くフランス全土の主要レジスタンス組織は、名目上ド＝ゴールを指導者に仰ぐ自由フランスの指揮下に入った。だが、レジスタンス組織統合の立役者ムーランは、この会議開催からわずか一か月後、悲劇的な最期を遂げることになる。

ヴィシー政府のレジスタンス弾圧

一九四三年六月二十一日、南仏リヨン郊外のカリュイールという町で、ムーランは同志八人と共にゲシュタポ（ドイツ秘密警察）に捕らえられた。

レジスタンス組織の国内総責任者と

レジスタンス組織化の概念図



独ソ戦開始以降、共産党系のFTPは東部戦線への独軍の増援を阻止すべく、無差別に独軍将兵を殺傷し、逆に報復を招いていた。これ以外の組織は分散して地下深く潜行していたが、42年にヴィシー政府が親独政策を強行すると、その規模は拡大。やがて全組織は自由フランスの指揮下にFFIに統合されるが、その内部には共産党系との指揮系統の分裂が残った。

なったムーランに対し、悪名高い自白強要の専門家クラウス・バルビイの手で凄惨な拷問が加えられ、抵抗組織に関する情報を喋るよう強要されたが、ムーランは最後まで黙秘を貫徹した。そして、ドイツ側の記録によると四三年七月八日、ジャン・ムーランは「ドイツへの移送途中にメス（ドイツに併合された東部の城塞都市）で死亡」した。

ムーランの死後、全国レジスタンス評議会の議長は、終戦までの間に三人の幹部によって引き継がれたが、彼らもまたゲシュタポによる執拗な捜査の目標となった。ゲシュタポによるレジスタンス指導者の弾圧は、親独派のラヴァルによる黙認下でより活発に進められ、各組織の有力指導者が次々と逮捕・殺害されたほか、レジスタンスのメンバーを匿っていると疑われた村々では、見せしめの処刑が繰り返し行われていた。

レジスタンスの弾圧で人々を震撼させていたのは、ゲシュタポやドイツ軍憲兵だけではなかった。ヴィシー政府の後押しを受けて、四三年一月三十日に創設されたフランス人武装民兵組織「ミリス・フランセーズ（フランス民兵団・以下「ミリス」と略）」もまた、情け容赦のない行動で反独抵抗組織の壊滅を図っていた。

ミリスの団長ジョセフ・ダルナンは、フランスにも極右のファシズム政権を樹立して、ヒトラーと共闘すべきだとの信念を抱いており、創設に際してはナチスの親衛隊（SS）を手本に仰いでいた。ミリスの団員によって殺害された国内レジスタンスの数は、三万人を下らないと言われている。

しかし、四三年二月のスターリングラードにおけるドイツ第6軍の降伏以後、東部戦線のドイツ軍が劣勢に転じているとの報せがフランス国内にもたらされると、今次大戦でのドイツの敗北を予感した人々がこぞってレジスタンス組織に身を投じるようになり、フランスから東部戦線へのドイツ軍駐留部隊の引き抜きと、ヴィシー政府が四三年一月に課した新たな強制労働義務（STO）が、この流れをさらに加速させた。

ムーランをはじめとする有力指導者の損失にもかかわらず、フランスのレジスタンス組織は着実に、その影響力と人員規模を増大させていったのである。

《ノルマンディ上陸作戦の支援活動》

強化されるド＝ゴールの発言力

ロンドンの自由フランス本部と、フランス国内に点在するレジスタンス各組織を結ぶ秘密の連絡網は、四二年一月に創設（正確には自由フランス軍の情報部「第二課」から改組）された「情報中央活動局（BCRA）」と呼ばれる軍事情報機関が管理していた。同組織の責任者はフランスの地下鉄駅にちなんで「パッシー」という秘匿名を持つド＝ワブラン大尉（後に大佐へと昇格）だった。

自由フランスから各組織へと提供される（米英両国から得た）活動資金や各種の装備品も、この情報中央活動局を通じて送られていた。

だが、全国レジスタンス評議会の成立により、ド＝ゴールの政治的発言力が一挙に増大したことに危惧を抱いた

イギリスのチャーチル首相は、いったんは承認した自由フランスと距離を置く姿勢を見せ始め、仏領北アフリカで自由フランスの現地部隊を率いるアンリ・ジローを、解放後のフランスの指導者に見立てていた。独裁者的な資質を持つド＝ゴールは、いずれ米英連合軍の意向に反旗を翻す可能性もあると危惧されたからである。

この動きを察知したド＝ゴールは、すぐに北アフリカに飛んでジロー将軍との連携を図り、四三年六月二日には彼とジローの二人を中心とする暫定政権「自由フランス国民解放委員会」を樹立。イギリスと北アフリカの自由フランス軍組織を統合した上で、同年十一月九日にはジローを従える形で、同年十一月九日には委員会議長の椅子を獲得した。

戦争の流れが連合国側の優勢へと傾いてゆくのを見ながら、ド＝ゴールは戦後のフランスにおける自らの権力基盤を意識しつつ、着々と存在感を強めていった。四四年二月一日、ド＝ゴールは全国レジスタンス評議会配下の全組織を「フランス国内軍（FFI）」に編入し、より厳密な指揮系統の一本化を実現した。

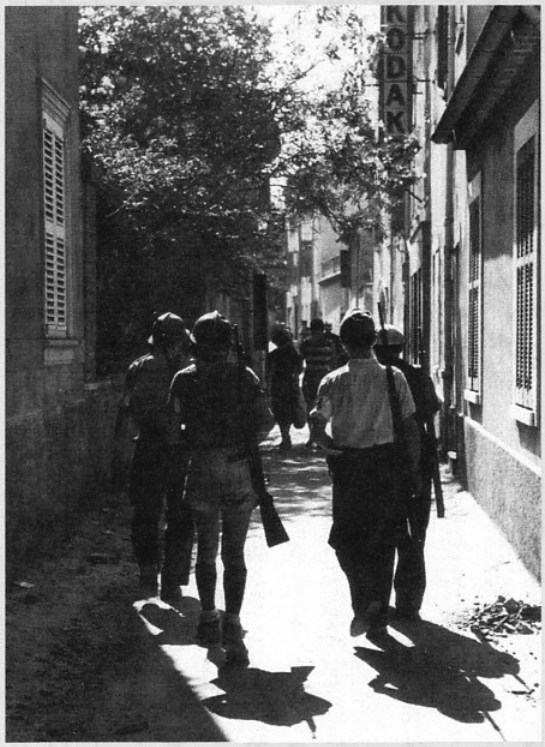
FFIの司令官には、北アフリカで自由フランス軍指揮官としてドイツ軍と戦った経験を持つマリー・ピエール・ケーニグが就任し、参謀組織の整備や、小隊・中隊・大隊・連隊を単位とする部隊の再編成など、それまでの「非正規軍」的性格から、より「正規軍」に近い組織への転換が進められた。

情報収集と輸送網の破壊工作

この頃になると、米英両国政府もド＝ゴールとFFIの影響力を無視できなくなり、イギリスの特殊工作機関SOEは各地のレジスタンス組織に対し、秘密通信や破壊工作の高等技術を教示するために、無線機や爆薬の専門家をパラシュート降下で送り込んだ。

来るべき米英連合軍のヨーロッパ反攻作戦において、FFI傘下のレジスタンス組織の持つ潜在的な能力を、上陸部隊の支援兵力として最大限に活用しようと考えたのである。

アイゼンハワー元帥を司令官とする連合軍欧州最高司令部（SHAEF・四四年一月十七日創設）にとって、フランスへの上陸反攻作戦を成功に導くためには、少なくとも二つの点でレジスタンスの助力が必要だった。一つは、海岸付近および内陸部に展開するドイ



レジスタンス組織「マキ」に加わるため、家を後にする４人の志願者。身元を知られないように、あるいは親類への報復を避けるため、背後から撮影している。

レジスタンス組織の内情

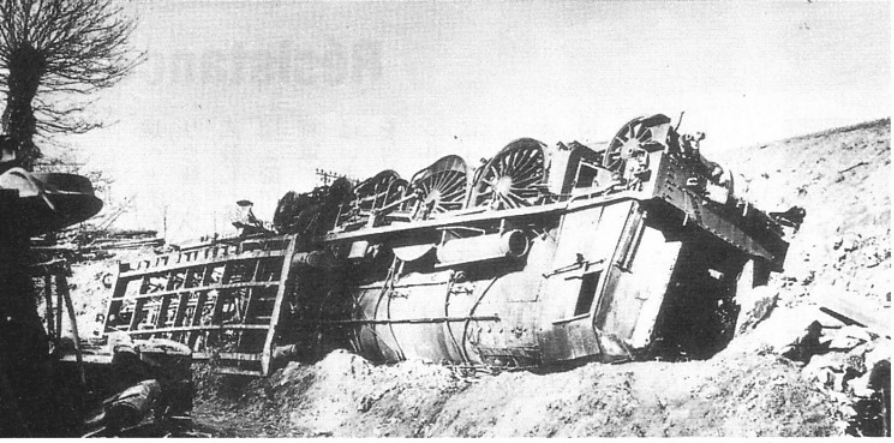
フランス国内で活動した各レジスタンス組織は、具体的にはいかなる組織内容を持ち、どのような活動を通じて人員規模を拡張していったのだろうか。

本文にも登場した「コンバ」を例に取ると、1940年夏の創設時はわずか数十人しかメンバーがおらず、当初は反独地下新聞『リベルテ（自由）』の発行が主な活動内容だった。その後、他の抵抗組織を吸収してメンバーの数が増加すると、フルネイ大尉ら7人の最高幹部による評議会が設立され、組織内の重要事項を協議する仕組みとなった。

全国レジスタンス評議会が設立される以前の時期には、「コンバ」の実行部隊は宣伝、諜報、軍事活動の三部門に分かれていたが、このうち最も重点が置かれていたのは、地下新聞の発行をはじめとする宣伝活動だった。何度かの名称変更を経て、41年に『コンバ』と改称された反独地下新聞は、42年末には3万部が秘密裡に発行・配布され、レジスタンス運動の活動家や潜在的な志願者の士気を鼓舞する上で重要な役割を果たしていた。

「コンバ」の活動家には、元将校や技師、実業家、官吏、知識人などが多かったが、42年9月にフルネイ大尉がロンドンでド＝ゴールと会見するまでは、軍事活動部門の役割はさほど大きくはなかった。だが、米英連合軍の反攻準備が本格化するにつれて、「コンバ」は諜報や破壊活動などの支援分野でも重要な役割を担うようになったのである。

文＝山崎雅弘



ブルターニュにおけるレジスタンスの破壊工作で転覆した機関車。Dデイ前後、蜂起したレジスタンスによる破壊工作で、ドイツ軍の通信・輸送は大混乱に陥った。このため独軍はフランス各地で釘付けになり、上陸軍への反撃を逸した部隊は、一説には装甲9個師団、歩兵6個師団に及んだという。

ツ軍部隊の兵力規模と、上陸阻止のために敵が配置している砲台や障害物についての詳細な情報の入手で、もう一つは上陸作戦の前後の時期における、敵の兵力移動の妨害だった。

重爆撃機を投入した鉄道への絨毯爆撃と、戦闘爆撃機（ヤーボ）による地上攻撃によって、敵部隊や軍需物資の移動はある程度阻止できたが、これらの手法はいずれもフランス市民を巻き添えにする可能性があり、また航続距離の関係から内陸部では使えなかった。そのため、鉄道線路や通信ケーブルの切断、機関車や給水タンクの破壊など、ドイツ軍の鉄道運行を麻痺させる破壊工作が、レジスタンスの手に委ねられたのである。

一方、軍事情報の収集においては、武装した兵士よりもむしろ、ドイツ軍駐留部隊に雇用されている地元の出入り業者が重要な役割を果たしていた。カーン地区のあるドイツ軍司令部で内装工事を請け負ったあるフランス人の業者は、ノルマンディ海岸のドイツ軍守備隊の配置を詳細に記した長さ三メートルの地形図を盗み出すことに成功し、ロンドンの米英連合軍司令部を喜ばせた。

フランス国内での軍事諜報活動は、自由フランスから派遣された「レミー大佐」ことジルベール・ルノーの司令部が統括しており、彼らはドイツ軍部隊の展開状況や、防御用構築物の種類と位置などを戦前発行の地形図に書き込んで、定期的にロンドンへと送っていた。

これらの情報は、米英連合軍が別ルートからフランス北部の海岸に潜入させた潜水諜報員らの報告や、航空機による偵察写真の分析情報と組み合わされて「BIGOT（ビゴット）地図」と呼ばれる精密極まりない軍用地形図の製作に役立てられた。

「秋の日の、ヴィオロンのため息の…」

一九四四年六月一日、英国BBC放送のアナウンサーは、フランス国内のレジスタンス各組織に向けて、十九世紀のフランス詩人ヴェルレーヌの「秋の歌」の冒頭部分を繰り返し読み上げた。

「秋の日の、ヴィオロンのため息の」

これは、米英連合軍によるフランスへの上陸侵攻作戦が間近に迫っていることを告知する暗号で、四日後の六月五日の夜には再び、作戦が二四時間以内に決行されるとの意味を持つ、同じ詩の続きの部分がラジオの電波に乗せられた。

「身にしみて、ひたぶるにうら悲し」

（上田敏訳）

この重要な暗号メッセージと並行して、個別のレジスタンス組織を対象としたいくつかの暗号が発信され、フランス国内では「Dデイ（作戦決行日・史実では六月六日）」の前後にマキやFTPを含むレジスタンス組織が一斉に蜂起し、ドイツ軍の移動や通信を妨害した。ドイツ軍は、上陸した米英両軍部隊に加え、これらの拠点に対しても熾烈な反撃を行ったが、いくつかの抵抗拠点では輸送機の不足から、連合軍が事前に約束した武器弾薬類の空中投下が行えず、弾薬が枯渇して壊滅させられるという悲劇が発生していた。

六月から七月にかけて、フランス国内で発生した鉄道の脱線事故や機関車事故は六〇〇件に及び、内陸部に配置されていたドイツ軍の装甲部隊は、連合軍がノルマンディ海岸に橋頭堡を構築する決定的な時期に、大規模な反撃を行うことができなかった。例えば、ドイツ軍有数の精鋭部隊である第2SS装甲師団「ダス・ライヒ」の場合、Dデイから十二日が経過した六月十八日になって、ようやくノルマンディの最前線へと到着した。

四四年六月時点で、フランス国内のレジスタンス人員数は約二〇万人に膨れあがっており、彼らの地道な後方攪乱活動により、米英連合軍は予定を上

回るスピードで、フランス北部の各地域へと進出した。この進撃には、アメリカ製のシャーマン戦車と各種兵器で武装した自由フランス軍の第2機甲師団（師団長はフィリップ・ルクレルク将軍）も随伴していたが、ド＝ゴールはいまだ米英両軍から独立した指揮権を付与されておらず、同師団はパットン中将率いるアメリカ第3軍の指揮下に組み込まれていた。

八月十九日、フランスの首都パリでロル・タンギーに率いられた共産党主導の一斉蜂起が発生し、市内の一部がレジスタンスの支配地域として確保されると、ド＝ゴールは慌てて翌八月二十日に連合軍欧州最高司令部を訪れ、パリ解放は自由フランス軍の手でやらせてもらいたいと強く申し出た。ぐずぐずしていると、共産党勢力が独力でパリを解放してしまい、自らの政治的影響力が削がれるのではないかとド＝ゴールは恐れたのである。

アイゼンハワーは当初、四〇〇万と推定されるパリ市民への食糧供給義務を負うことを懸念し、パリは攻撃せずに包囲下に置いて、ドイツ軍守備隊の降伏を待つ予定だった。

だが、共産党によるパリ支配をこのまま黙認すれば、戦後のフランス国内で自由フランス軍と共産党による主導権争いが勃発することは目に見えていたことから、アイゼンハワーは米英両国政府の許可を受けた上で、ド＝ゴールのパリ入城案を最終的に承認した。

《パリ解放とレジスタンスの解隊》

役割を終えたレジスタンス組織

一九四四年八月二十五日、戦車二〇〇輌と各種車輌四〇〇〇輌を装備した自由フランス軍の第2機甲師団が、フランスの首都パリに入城した。

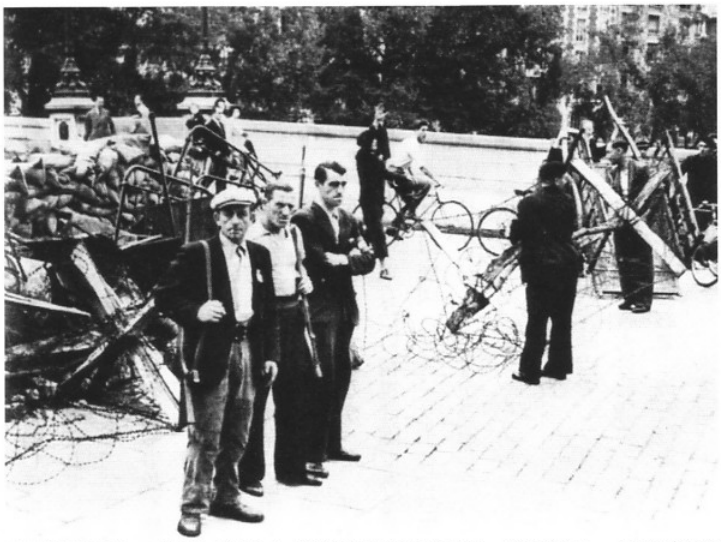
パリ市内では、前記したレジスタンスの一斉蜂起によってドイツ軍の防衛態勢は骨抜きにされており、パリ守備隊の責任者フォン・コルティッツ歩兵大将は、ヒトラーが発したパリ市の破壊命令を拒絶して自由フランス軍に投降、市街戦を回避することで「花の都」の支配権をフランス人に明け渡した。

翌二十六日、ド＝ゴールはいまだドイツ軍の狙撃兵が残るパリのシャンゼリゼ大通りでパレードを行い、祖国への凱旋を内外に強く印象づけることに成功した。

だが、二〇〇万人の市民が参加したこのパレードにおいて、全国レジスタンス評議会とパリ解放委員会（共産党系）の代表者は単なる「ゲスト」として参列を認められただけだった。

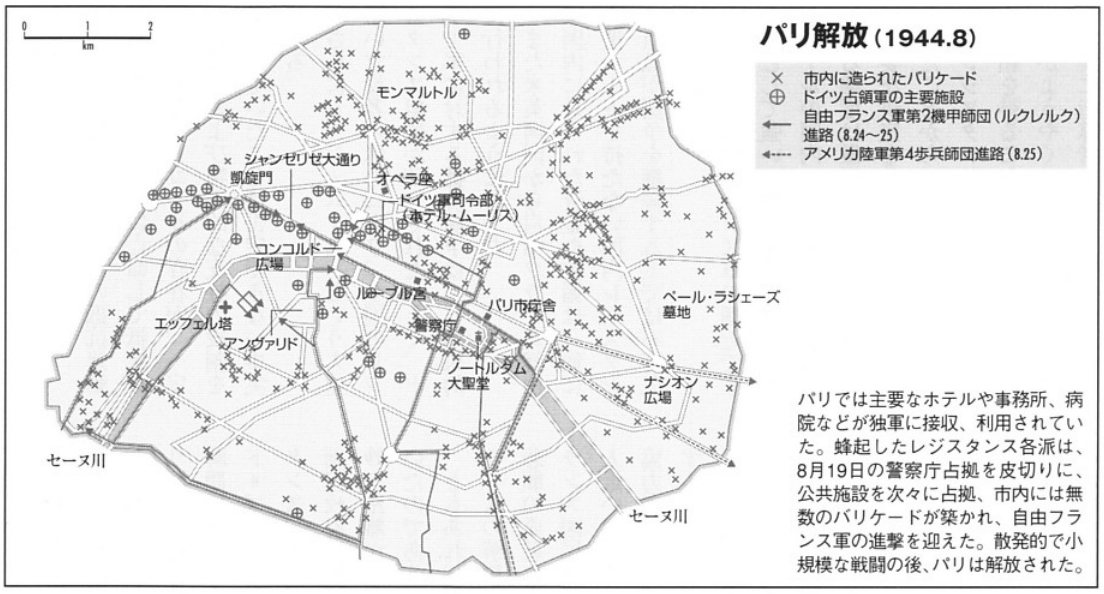
そればかりか、パリ入城と同時に全国レジスタンス評議会の議長ビドーと会見すべきとの側近の助言を、頑なに拒絶したド＝ゴールは、後回しにしたビドーとの会見では握手すらせず、シャンゼリゼのパレードではレジスタンス側の代表者ビドーに「一歩下がりたまえ」と言い放った。戦後のフランスにおける政治的主導権の獲得を目指すド＝ゴールにとって、レジスタンス組織の有力幹部は皆、いまや権力闘争のライバルだったのである。

一方のレジスタンス側でも、他者の功績を認めようとしないド＝ゴールの自己中心的な行動に対する不満が再燃し、ド＝ゴール派と反ド＝ゴール派の対立が表面化し始めた。退却するドイツ軍を追撃して、連合軍の部隊がフランス国内を解放してゆくのに伴い、ド＝ゴール派のFFI部隊は次々に自由フランス軍へと編入されたが、反ド＝



1944年8月19日、パリのレジスタンスは連合軍の進駐を前に一斉に蜂起し、ドイツ占領軍と戦闘状態に入った。写真は、市内にバリケードを築くフランス国内軍（FFI）の戦士たち。

學研 歴史群像 2006年8月號 No.78



パリでは主要なホテルや事務所、病院などが独軍に接収、利用されていた。蜂起したレジスタンス各派は、8月19日の警察庁占拠を皮切りに、公共施設を次々に占拠、市内には無数のバリケードが築かれ、自由フランス軍の進撃を迎えた。散発的で小規模な戦闘の後、パリは解放された。

ゴール派のレジスタンス組織はド＝ゴールへの服従を拒んで、独立指揮権を保持しようとした。

こうした動きに警戒感を強めたド＝ゴールは、四四年十月二十八日に国内のレジスタンス組織に対する武装解除を布告し、現存する各組織に対しては自由フランス軍に加わるか、武器を捨てて市民生活に復帰するかの二者択一を迫った。共産党系のFTPは、最後までこの武装解除に抵抗したが、亡命先のモスクワから帰国した有力指導者モーリス・トレーズの説得を受け、最後には闘争の停止と武器の放棄を受け入れた。この期に及んで、フランスを新たな内戦へ導くことは、共産党にとっても得策ではなかったからである。

四年間にわたって艱難辛苦に耐え続けたレジスタンス闘士たちの、圧制への抵抗という自然権に根ざした地道な活動は、隣国ドイツによる占領統治からの完全な主権回復という大きな成果をもたらすことに成功した。

だが、解放の功労者である彼らは、その成果と引き換えに、米英連合軍という後ろ盾を得たド＝ゴールの描いた「自由フランス軍による祖国解放」という、輝かしい政治的ストーリーの陰へと追いやられてしまったのである。

レジスタンスが残したもの

フランスのレジスタンスのような非正規軍による隠密活動は、その性格上、全容を把握することは困難で、彼らの功績を定量的に評価することもきわめて難しい。後に亡命政権の主導で組織を統合されたとはいえ、自然発生的に各地で誕生した各抵抗組織は、当局の摘発を恐れて詳細な行動記録や人員リストを残さない場合が多かったからである。

だが、本文中でも述べたように、米英連合軍による四四年六月のノルマンディ上陸作戦と、同年八月に実施された南仏プロヴァンス地方に対する二次上陸（アンヴィル作戦）を成功に導く上で、フランスのレジスタンスが果たした直接的・間接的な軍事的役割は計り知れないほど大きかった。彼らの情報収集活動や後方での破壊活動が無かったなら、ノルマンディ上陸作戦が四二年八月に実施された英連邦軍によるディエップ上陸（ジュビリー作戦）と同様の、無惨な失敗に終わっていた可能性も否定できない。

連合軍欧州最高司令官アイゼンハワーは、戦後にレジスタンスの存在価値を「正規軍一五個師団に匹敵した」と評したが、各地方の抵抗組織による、散発的ではあるが絶え間のない襲撃や破壊工作は、ドイツ軍部隊に大きな心理的ボディブローを与えることとなった。

前線で対峙する物量豊富な米英連合軍に加えて、戦線背後の後方地域に潜むレジスタンスという脅威の存在は、ドイツ軍に拠点防御という選択肢を捨てさせ、パリの無血開城と、猛将パットン率いる第3軍の進撃を以てしても捕捉できなかったほど迅速かつ整然とした、ドイツ軍の東方への全面退却と

いう「戦果」をもたらすこととなったのである。

このようなレジスタンスの抵抗運動において、ロンドンに亡命して抵抗継続を叫んだド＝ゴールの存在が、一定の精神的および物理的な支柱の役割を果たしていたことは否定できない事実である。

さらにジャン・ムーランという人望厚い立役者の尽力により、全国のレジスタンス組織が統合されたことで、ドイツ軍に対する抵抗闘争はより効果的に行われるようになった。

また米英両国から自由フランス経由で国内に送られた資金や装備は、他に支援ルートを持たない国内レジスタンス組織が闘争を継続する上では不可欠のものだった。

しかし、自由フランス軍の側近ですら時として強い口調で諫めたほど、ド＝ゴールの国内レジスタンス指導者に対する態度は傲岸不遜で、合議を経ずに重要な決定を独断で下すことが多々あったことから、ド＝ゴールは長い間、国内レジスタンスと米英両国政府による信頼を得ることができなかった。

彼がようやく、フランス解放運動で名実共に指導者として認知されるのは、大戦における連合軍側の勝利が濃厚となった四三年以降のことであり、しかもパリ解放という歓喜の瞬間においてすら、ド＝ゴールとレジスタンス、そして米英両国政府の間には微妙な距離が存在していたのである。

ともあれ、祖国フランスの解放という悲願の成就に沸くフランス国民は、四万人近い同胞を「対独協力者」として告発する一方、ド＝ゴールを戦後の国家指導者として認め、四四年九月二日にパリで樹立された「フランス共和国臨時政府」を基に、第一次ド＝ゴール政権が誕生した。だが、その内実は政治的安定とはほど遠いものだった。

一年後の四五年十月に実施された戦後最初の総選挙では、ド＝ゴールが最も警戒した共産党がレジスタンス活動の功績を認められて第一党の地位を獲得し、政策方針を巡って彼と鋭く対立。人民共和派や社会党も巻き込んだ連立政権内の政争が深刻化し、ド＝ゴールは翌四六年一月、政局混乱の責任をとって首相の辞職を余儀なくされてしまう。

こうして、レジスタンスの活躍でドイツ軍支配から解放されたはずのフランスは、その抵抗運動の過程で生じた小さな齟齬の積み重ねによって、遂には近隣諸国から「ヨーロッパの新たな病人」と評されるほどの政治的混迷へと陥ることとなった。

そして、かつての国内レジスタンス組織（共産党）との政治的闘争に敗れた「戦時の英雄」ド＝ゴールは、アルジェリア戦争（本誌第64号参照）に伴う首相復帰までの一二年間、歴史の表舞台から一時退場することになったのである。

1999年6月18日、パリ郊外のヴァレリアンの丘で、ド＝ゴールの対仏ラジオ放送の記念日式典に参加するシラク大統領（左手前）。背後の壁面にはド＝ゴールと自由フランスの象徴である巨大なロレーヌ十字が聳え立っている。ロレーヌは度々ドイツとの領有争いがあった地域であり、その地の表象で、またド＝ゴールの先祖がこれを掲げ、百年戦争で祖国のために活躍したことから、選ばれた印であった。フランス・レジスタンスの苦闘と栄光は、彼の名と共に語り継がれていくことだろう（AP/WWP）。

〈参考文献〉アルベール・シャンボン　福元啓二郎訳『仏レジスタンスの真実』（河出書房新社）／ヴェルコール　森乾訳『沈黙のたたかい・レジスタンスの記録』（藤森書店）／アンリ・ミシェル　淡徳三郎訳『レジスタンスの歴史』（白水社）／海原峻編『ドキュメント現代史　レジスタンス』（平凡社）／淡徳三郎『抵抗――レジスタンス』（岩波文庫）／柏木明『フランス解放戦争史』（原書房）／ピエール・モニエ　福本秀子訳『我が友ジャン・ムーラン』（東洋書林）／ジャン・ドフラーヌ　大久保俊彦・松本真一郎訳『対独協力の歴史』（白水社）